

子どもがふみだす ふくしま復興体験応援事業 採択事業一覧表 <事業概要>

38事業採択（事業1～7団体、事業2～16団体、事業3～15団体）

No	事業	補助申請団体名	申請事業名（内容）	校種	事業概要
1	1	福島県立会津学鳳中学校・高等学校美術部	「ふるさとの思い出リーフ」プロジェクト～木堀の温もりとともに～	中高	美術部員たちが仮設住宅を訪問し、被災された方々からふるさとの思い出写真（家族、住まい、景色等）を見せていただき、交流をかねてそこに込められた深い思いについて伺う。特に、思い出深い写真を1枚選んでいただいてお借りし、それを木の温もりを感じさせる着彩木彫リーフ作品として仕上げ、完成後直接お届けにあがる。（ミニ展示会も開催予定）
2	1	郡山市立桃見台小学校父母と教師の会	野菜作り体験を通して、ふくしまの「農」の力を実感しよう～ふくしまの野菜風評被害克服への子どもたちからの発信～	小	子どもたちとPTAが一緒になり、親子で、実際に野菜を作り、できた野菜を調理し、おいしく食べて、ふくしまの野菜のパワーを実感する。また、若宮前仮設住宅住民（富岡町・双葉町・川内村）に、ふくしまの野菜を調理した料理を食べいただきながら交流を図る。さらには、「ふくしまの野菜」をおいしく食べる「ふくしまの野菜料理レシピ」コンペを行う。出来上がった「ふくしまの野菜」を使った「野菜料理レシピ」を、ホームページで全世界に発信する。
3	1	郡山市立桃見台小学校	花の力で地域を元気にしよう	小	若宮前仮設住宅住民（富岡町・双葉町・川内村）へ花苗を届け、一緒に植えるなどの交流活動を行う。また、原発事故以来誰も寄りつかなくなくなった近くの公園で、地域の住民といっしょに花を植える活動を展開する。さらには、幼稚園や保育所などに、花苗を届けたり、園児たちと交流する。
4	1	新地町立福田小学校 P T A	被災者を元気にしようプロジェクト	小	福田小学校全校児童80名とともに、被災したお年寄りが入所している学区内の特別養護老人ホームを訪問したり、新地町福田地区の応急仮設住宅から集団移転した方々と福田小学校や老人ホームで一緒に活動したりしながら、被災された方々へ子どもたちの元気を発信し勇気づける交流活動を実施する。
5	1	福島県立塙工業高等学校 和太鼓部	「塙工業高等学校和太鼓部 餅つきボランティア」	高	いわき市南台および郡山市富田町仮設住宅を訪問し、和太鼓演奏及び餅つきを通して、避難されている方と交流することで、思いやりやボランティア精神を育む。また、演奏を楽しんでいただくことを通して、自己有用感・肯定感を感じさせ、今後の精神的な土台作りの一環とする。さらには、震災から5年が経過し、閉塞感を感じている避難者の方々が一時でも晴れやかな気持ちになれる機会とする。
6	1	ボーイスカウト福島連盟	第15回ボーイスカウト福島連盟野営大会 第5回北海道・東北ブロック野営大会	小中高	ボーイスカウト福島連盟野営大会・北海道・東北ブロック野営大会が猪苗代町天神浜で開催される。大会には福島連盟のスカウトとして参加し、福島県の被災と復興の現状を全国に発信する展示ブースを開設し、福島県の現状を認識してもらう。また、参加した多くの他県連盟のスカウトと福島県内小学生、中学生の一般参加者の交流と災害に対する意見交換の場（フォーラムを実施）を持ち、次の世代に震災の対応と減災の必要性を伝えていく。福島県での開催となるため、野営の食材には福島県産を使用し、福島の食の安全性を参加者にアピールする。大会期間中は活動プログラムに震災・復興に関するものを取り入れるほかパネル展示等を行い情報の発信をする。

7	1	大成地域公民館	「ふくしま」がもっと元気になるために、地域にも目を向け、今、私たちができることに取り組む～地域の中で、地域の方たちと一緒にに行う「花を育てる活動」を通して～	小中	郡山市内の小・中学生を対象とし、地域の活性化のため、地域の方たちと一緒に、地域の中で「花を育てる活動」を子どもたちの企画により行い、その活動の様子をまとめ、ホームページに掲載して、全世界にふくしまの子どもたちの取り組みを発信する。
8	2	いわき市	いわき志塾 長崎派遣事業	中	市内中学生のうち公募で選ばれた生徒が、東日本大震災での経験や学校での学び、本市同様に放射線被害を受けた広島市及び長崎市での交流体験を生かし、それらを生かした福島の現状・今後の展望を発信する。
9	2	あいづっこ人材育成プロジェクト実行委員会	会津ジュニア大使～会津の元気を全国に発信～	中	会津若松市立中学校在籍の中学生を「会津ジュニア大使」として親善交流都市である北海道余市町へ派遣し、現地の中学生・市民・観光客との交流を図るとともに、現地でプレゼンテーションを行い会津の元気・会津の魅力を発信する。会津若松市内中学校から募集し、参加者を決定した後事前研修会を行い、訪問研修後には市長へ報告するとともに、各学校において実施報告会を実施する。
10	2	MJCアンサンブル	音楽で結ぶ ふたつの被災地 世界の絆	小中高	各地での音楽交流会において、合唱や音楽に親しみ震災支援への感謝を伝え、さらにピーアールDVDを上映し、「今の福島」を発信することにより、福島県の現状を広く他県の方々に伝えると共に、メンバーの郷土を愛する心を一層育む。また、震災直後から被災3県をボランティア活動している団体や昨年来訪頂いた団体の皆さんから「ふくしま」の感想や阪神淡路大震災を体験した方々と世代間交流・意見交換、各会場でアンケート調査等を実施し、将来福島をより良くするための情報収集活動を行う。さらに、世界各地で演奏を重ねてきたMJCアンサンブルOG会、高座日台交流の会との交流では広い視野からの「ふくしま」を再発見を図る。
11	2	福島県PTA連合会	水俣との交流事業	中	昨年度は、本県中学生が水俣市を訪れ、水俣病の歴史やそれを乗り越えてきた人々の努力や苦労、知恵を学び福島と重ね合わせることで、福島の復興へ向けて自分たちのできることは何かを考え熟議を行った。その結果、参加中学生を核とした復興への歩みを実践化することができた。 第4回目となる今年度は、水俣市の中学生を招き、福島県の置かれた状況を見聞してもらい、福島県の中学生との研修・体験活動を行っていきたい。特に、放射線の正しい理解を図ってもらうため、環境創造センター、モニタリングセンター等での学習・体験を通して、福島県の現状の正しい理解と「風評被害」「環境問題」等について熟議を重ね今後のふるさとへの誇りや愛着を高め、復興へ向け、中心的な人材の育成を図っていく。
12	2	国立大学法人 福島大学	地方創生イノベーションスクール2030～海外の生徒との協働プロジェクト実施～	中高	OECD東北スクールの成果を踏まえ、被災した中高生や地方の生徒達が海外や地域・企業等の多様な人々と協働しながら地域課題解決のための「プロジェクト学習」に取り組む。この活動を通して21世紀型スキルを涵養するための教育モデルの開発と、生徒の力をいかしながら地域課題を解決する地方創生モデルの創出につなげる。

13	2	AIZU塾	未来につなぐ絆 2016 ～AIZU塾・むつ市こどもたちとの交流～	小 中 高	AIZU塾生及び会津在住の小・中・高校生を対象に、次世代を担う地域活動リーダーとしての見聞を広めるため、県外研修を行い、それぞれの立場でできる地域活動リーダーを育成することを目的とする。青森県むつ市は歴史的に会津とかかわりの深い地域でもあり、2011年東日本大震災という同じ体験をし、5年経過した今、次世代を担う小・中・高校生は地域でどんな活動をし、復興に寄与しているのか研修を行い、研修後も地域復興のため、地域活性化のため、情報交換体制を構築するとともに、自分の将来像を実現させるための機会としたい。本事業を通して、未来を見つめ「家族」「友達」「地域」の絆をより一層強くし、地域活性化・地域振興のために、会津を、福島を、日本を担う人材を育てる。
14	2	福島県立平商業高等学校	平商フラダンス大使ふくしまの復興を世界へアピールプロジェクト	高	フラダンス愛好会が、ハワイを訪れ本場のフラダンスを学び、フラダンスを通して、ハワイの高校生と交流を持ち、アラモアナショッピングセンターステージとビーチウォークステージにおいて、日本の歌にのせてフラダンスを発表するとともに、本校で商品開発したフラムーネ（ラムネ飲料）とフラダンサーをイメージした平商フラキャラストラップを配布し自分たちのがんばりを見せる。このことにより、世界各国から観光で訪れている人々やマスメディアを通して世界の人々に、東日本大震災からの福島の復興の状況を伝え、災害で苦しんでいる世界の人々を元気づける。また、ハワイのセメタリークリーンボランティアを行うことと、領事館訪問を行い福島の復興の状況を伝え、フラダンスを通してハワイと福島の絆つくりを行う。さらに、帰国後は、震災で苦しんでいる浜通りの人々を元気づけるため、大熊町、富岡町、楢葉町と連携しそれぞれ開催される秋祭りでのフラダンス演舞を行うことと、いわき市制施行50周年イベントに参加し演舞を行い地域活性化に貢献する。
15	2	いわき遠野の未来を創る会	遠野の風に 未来を乗せて II～高校生が 汗を流す復興活動と地域作り～	高	被災地であるいわき市遠野町の復興事業として、地元高校生が参画することで、町の復興と地域人材の育成を図る。高校生が地元企業の協力の下、地域特産品の企画・開発・販売を通して、広報キャラバン隊として県外・海外にアピールする。また、遠野歳時記「満月祭」への協力、避難者や小中学生との交流活動や伝統を継承する活動等も実施し、ふくしまの復興へ寄与する。
16	2	会津若松市子ども会育成会連絡協議会	あいづっこから広げよう ふくしまの食 in 南会津	小	会津若松市子ども会のジュニアリーダーを目指す子ども会員を対象に、原発事故による福島県の農作物や普段口にしている食べ物に与える風評被害の影響に現地で触れ、今後の福島県の復興のあり方と食育について考えることで、ジュニアリーダーとしての資質を高め、子どもたちがそれぞれが各地で活躍し福島県に貢献するものである。また、本事業の体験を通して福島県の風評被害の実態や、農家の取り組み等子ども達が学んだことを冊子等にまとめ、福島県の風評被害の払拭を他県にPRする。

17	2	福島県立福島高等学校	Radiation Protection Workshop in Fukushima 2016	高	ワークショップへの参加を通して、生徒に、原発事故以後の福島への自信と信頼を回復させるとともに現在の課題に気づかせ、それらを国際的に発信する力を育成することを目的とする。昨夏は福島で、日仏の生徒が福島の安全と風評の現状を包括的に学ぶワークショップを行い、最終日には学び考えたことを発信した。この活動は生徒たちにあらためて福島への自信を回復させ、向き合うべき現在の課題は何か確認する機会となつた。そこで今年は、フランスばかりでなく台湾など東アジアや首都圏の高校にも声をかけ、特に福島の農の再生を中心としたワークショップを実施する。ワークショップを通じて見聞きし、体験し、話し合い、考えたことを、海外や首都圏の高校生とともに国際的な視点で捉え発信することで、世界の放射線防護文化を高める活動にも貢献させたい。3月にはフランスでのワークショップに参加し、今夏の福島での活動の発信も行う。
18	2	福島県立小高商業高等学校	小高区復興PRアニメ作成～高校生の力で小高区復興の手助けを～	高	震災後、時間が止まっている小高区の復興を加速させるため、小高区にできる新統合高校（小高商業高校、小高工業高校）を中心にアニメを作成する。この事業を行うことにより、若い高校生の力を結集させ小高区の復興を加速させ、他地区に避難している住民の帰還を促すことにつなげる。また、本校を目指す中学生にアピールすることにより、将来復興の担い手となる人材の育成を目指す。さらに、生徒たちが参加し、アニメの作成、PRをする過程で、地域を知ることにより、若者が集う活気溢れる街づくりの創造を目指す。
19	2	特定非営利活動法人チームふくしま	震災があったから“こそ”生まれた物語を全国に発信！ひまわり甲子園 2017	小中高	福島県の子どもたちが、震災の体験談や震災があつたからこそ気づいたことを、全国で講演活動を行う。福島ひまわり里親プロジェクトに取り組む教育団体などが、復興支援活動を通して生まれた物語を発表するイベント「ひまわり甲子園」の地方大会での講演会・講話・交流会を行う。また、広島「原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さん」の母校生徒との交流。広島土砂災害、熊本地震の被災地との交流・支援活動を行う。
20	2	国見町	国見ジュニア応援団	小中	ふくしまの歴史や伝統文化、地域の産業、風評被害等震災後の福島県と国見町の様々な課題等の学習（福島学・国見学）を深めるとともに、ふくしまの復興に取り組む生産者等の団体と連携を図りながら県内外における様々な交流活動を通じてふくしまの現況や復興への取り組みを発信し、ふるさとに愛着を持つ子どもを育成する。
21	2	学校法人東稜学園 福島東稜高等学校	2016年「ふくしま伝え隊」派遣事業	高	2006年から続く、国立天文台水沢 VLBI 観測所主催による「Z 星研究調査隊」（国立天文台施設を利用した高校生対象の研究活動）に参加するにあたり、これを機に同じ震災の被災県である岩手県の高校生や同観測所の職員の方々と交流を深めながら、福島の今と復興を理解していただき、本隊も他県の実情とこれからの復興について学ぶ。
22	2	農業高校経営マーケティングプログラム協議会	高校生による実践的六次化商品開発事業	高	高校の授業の一環で、コンサルティング会社・NPO・地元の農家らが講師となり、生徒 74 名は模擬会社を作り、東京のマーケットを意識した商品開発、事業計画作成、販売戦略の立案、販売、決算、事業評価の一連の 6 次化商品開発のプロセスを 1 年かけて実践的に体験しながら学ぶ。2 月に、実際に東京の既存のマルシェに出店し、自分たちが開発した商品の実践販売を行うことで 1 年間の授業の振り返りを行う。これにより、将来の地域復興や再生を担う高校生が、現地産品に高い競争力や付加価値をつけられるような製品開発力や課題解決力、そして経営に関する知識の習得がされる。また、グループワークを中心とした実践的授

				業を行うことで多様な価値観を尊重する姿勢や自分らしさの発信、グループで協力して行動する姿勢等のマインドが養われる事業である。
23	2	喜多方市ふるさと振興株式会社	きたかた山都 そばの里 「山都蕎麦で絆でつなぐ～高校生による手打ちそば実演・アピール事業～」	高 生徒が丹精こめて作付けし、収穫した平成28年産の秋そばの新そば粉を使い、日本橋ふくしま館「MIDETTE」において、そば打ち有段者の生徒が挽きたて、打ちたて、茹でたての「きたかた山都そば」を実演し販売する。首都圏の方々に、安全・安心で元気な「ふくしま」の食をPRすると共に、産地である「きたかた山都・そばの里」での「食べ歩き」など、産地で食することの醍醐味なども添えて喜多方市への誘客促進と風評払拭を図る。また、きたかた山都そばの里のそばや喜多方市の観光に関するパンフレットを展示し、毎年行われている喜多方市内の各種そば祭りや冬まつりでの「そばフェスタ」の案内を行い、地域産業(そば関連産業)の活性化にも寄与する事業である。
24	3	ひろの映像教育実行委員会	ふるさと創造・映像教育プロジェクト	中 東日本大震災を機に中学校において授業で映像制作を行っており、映像制作をとおして、ふるさと広野町の良さを再発見し、伝統と文化を見つめ直すことにより、広野町の未来と地域の復興に貢献できる子どもたちを育成する「ふるさと創造学」に取り組む。 また、今回の事業で制作された映像を「日本こども映像コンクール」への出展を予定している。
25	3	YWCA活動スペース「カーポふくしま」	福島から考える新しいエネルギーPart2	高 福島県在住の高校生が自然エネルギーの仕組みや使い方を学び、日々の生活で実際に活かし、社会に広めていく活動を行なう。特に今年度は、福島県内の再生可能エネルギーの取り組みに焦点をあて、未来の福島のエネルギーについて考えることを通して、原発事故後の福島で高校生たちがどのように生きていくのか自らが理解を深め、選択するエネルギーのあり方を考えることにより、福島の可能性に気づき、地域の再生の担い手となることを目指す。
26	3	学校法人新潟総合学院 国際アート&デザイン専門学校高等課程	福島デザインコンテスト2016	中 東日本大震災から丸5年が経過したが、未だに避難生活を送る人も多く、身体的・精神的な支援を必要としている現状が今なお続いている。毎日のストレスと未来への不安の中、少しでも「元気・笑顔・希望」を与えられるもの一つに文化・芸術分野がある。福島県全域の中学生を対象に福島県固有の資源である自然・文化・伝統をテーマとした全4部門(①キャラクターイラスト②4コマ漫がん③ファッションデザイン④ネイルデザイン)のデザインコンテストを実施。各部門の受賞作品を展示会形式で県内外各地にて発信することにより、「元気で明るいふくしま」を広くアピールし復興を加速させる一助とする。
27	3	福島県高等学校文化連盟	「福島県高等学校総合文化祭 活動優秀校公演～ふくしまをつなぐ2016～」	高 文化芸術活動において、顕著な実績を有する福島を代表する団体並び個人を選抜し、その活動の発表を行う活動優秀校公演において、開催支部生徒実行委員自らが「復興とこれからの福島」をテーマとした活動を企画運営し、公演の中で発表を行う。いわき公演では、原発事故の被災により平成29年度より休校となるサテライト5校が最終年度を迎えるにあたり、当該校生徒を会場に招き、その「校歌」を本県が誇る合唱専門部を中心とした音楽系専門部生徒によって演奏発表を行うとともに、新聞専門部の生徒によって各校を題材とした紙面を作成し県内外に発信する。

28	3	福島県高等学校教育研究会農業部会	ふくしまから美味しさと元気を発信！～ふくしま復興マルシェ	高	日頃、福島県内の農業高校で学ぶ高校生が、農業実習で栽培した生産物や加工食品、復興6次化新商品などを首都圏で販売することで福島のおいしさと安心・安全のPRを推進する。福島の農業高校生がその専門性を生かして主体的かつ意欲的に社会体験活動に参加することにより、各高校の代表生徒が首都圏で充実した販売実習を展開する他、インターネット販売の企画・運営に積極的に取り組む事業である。また、福島の復興PRに寄与するだけでなく、参加生徒の地域貢献に関する達成感など意識の変容など将来の夢や進路目標の一助となる事業である。
29	3	一般社団法人Bridge for Fukushima	福島・中国高校生社会課題解決企画「あいでみ」	高	本県高校生と世界トップレベルの高校である復旦大学付属中学の高校生が「互いの地域が抱える社会課題を理解し合い、自分たちが取りうる社会課題解決の手段を探す」をテーマにディスカッションする相互交流企画を共同で創り上げ、高みをめざし切磋琢磨する関係を築き上げる中で、「社会変革を目指し若い世代が主体的に努力する新たな福島」の姿を県内外に発信し、福島に対する負のイメージ(原発事故・変化に乏しい・若者がいない)を払拭する事業である。
30	3	福島県立福島高等学校	日英サイエンスワークショップ	高	イギリスの高校生、教員(30名程度)を日本に招き、東北地区の高校生、教員(40名程度)と共に東北大大学での研究室活動、福島県や宮城県での震災復興関連活動、自然体験活動等を行う。この目的を達成するために、参加高校間の連携だけでなく、東北大大学(日本)、クリフトン科学トラスト(英国)の協力を得ながら実施する。
31	3	福島県立福島高等学校	福島高校S S H部生物班陸上養殖・循環型農法プロジェクト	高	高校生発案の福島復興企画を支援し、生命科学の知識・技術を習得させるのみならず、環境に優しく技術的にも新しい好適環境水の魚に対する生理学的な影響を調査し試験養殖の実施とともに、未来の農業として注目を集めている魚の養殖+水耕栽培による循環型農法であるアクアポニックスを立ち上げて、実践的な事業を運営することにより、福島県の新しい水産業の可能性を模索するとともに土湯温泉を活性化することを目的として実施する。最終的にはこの好適環境水を通じた養殖と野菜が産業として土湯温泉で確立し、それらが福島県内に普及することで復興に寄与することを長期目標にしている。
32	3	福島県立小高商業高等学校 流通ビジネス科	南相馬市の高校生の力で福島県復興PR	高	生徒が販売会を実施することで、地元の良さをPRするだけでなく、原発被災県で風評被害を受けている福島県南相馬市の高校生の力で福島県南相馬市の復興を広く発信する。さらに、販売会を通して将来地域に貢献できる人材を育成する。販売会は10月又は11月に宮城県石巻で実施が予定されている「復興グルメF 1大会」での実施、又は、地元で販売会を実施する内容を予定している。
33	3	福島県立安達東高等学校	Bee Happy ! ～安達東高から元気のプレゼントから	高	震災から5年が経過した今、復興に関して総合学科で学ぶ専門性を生かして自分達が取り組むべき事を考え、元気な姿を全国に発信する事をとおして地域の復興及び避難者支援を行う。復興に関する講演会開催、「M I D E T T E」(東京)での販売会及びPR活動、避難者仮設住宅訪問等を行う。

34	3	福島県立郡山商業高等学校	フード・アクションこおりやま	高	高校生が主体となり、高校で学んだ商業の知識を活かし、柔軟な発想で福島県産の食に関する商品開発から、広告・販売まで行う。福島県産の食材を使った商品を全国へ発信することで、風評被害の払拭並びに食の安全を全国へPRしていく。起業家教育講座、PRキャラ作成、HP作成、販売活動（郡山市内商店街での販売、東京等県外での販売）、外部発表会への参加（商業高校フードグランプリ）などを行う。
35	3	NPO法人 はらまち交流サポートセンター	「南そうま福幸植樹会会場」の活用とハマナスや有用樹の加工品・新ブランド化に挑戦	高	本事業は、昨年度に実施した「南そうま福幸植樹会」を発展させ、各樹種の生育が進む植樹会場の管理や加工品・苗木としての活用を通して、高校の卒業生も含めた若者が、地域が抱える諸問題に興味・関心を持ち、積極的に解決しようとする態度や能力を養うことを目的としながら、南相馬及び福島県の復興・再生を外部に継続的に発信できる仕組みづくりに取り組むものである。
36	3	ふくしまバトン	福島から熊本へ繋げるバトン	小 中 高	熊本の仮設住宅を慰問し、被災した方々と交流する。その中で、自分達の特性である日本舞踊を披露し、お年寄りには懐かしさを子どもたちには新鮮を感じてもらう。また、可能であれば炊き出しをして、住民同士のコミュニケーションを図る。
37	3	久之浜大久地区まちづくりサポートチーム	「教育とまちづくり」社会貢献活動	小	まちの復興事業は、日々その変化が街の風景に表れてきている。復興事業と共に成長していく子どもたちが、まちづくりに積極的に関わられるように、小学校の教育プログラムをまちづくりの専門家がサポートする。小学校という公共性の高い場所で、子どもと地域の人が一緒にまちづくりを考えることで、これからまちづくりの担い手となる実感、愛郷心、誇りを持てるような継続的なまちづくりを目指している。また社会活動として、防災緑地の育成、管理に関わることで、まちの一員としての実感を子どもたちに持ってもらう。教育と実践の両方を体験する事業である。
38	3	福島県立塙工業高等学校 和太鼓部	ふくしま復興PR演奏 塙工業高等学校和太鼓部	高	県外での和太鼓演奏及びPR活動を通して、福島県の高校生がこんなにも、はつらつと活動しているということをアピールすることで本県への風評を払拭する。また、本県の将来を担う人材であるという生徒達の意識を高める。また、演奏を喜んでいただくことで自己有用感・肯定感を感じることにより、今後の精神的な土台作りの一環したい。また、震災から五年が経過し、閉塞感を感じている本県からの避難者の方が耳にした場合、故郷に思いを馳せ、一時でも晴れやかな気持ちになれるような演奏を目指しての活動である。